

第155回東京オペラシティ定期シリーズ

6月23日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第986回オーチャード定期演奏会

6月25日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第987回サントリー定期シリーズ

6月27日(火) 19:00開演 サントリーホール

指揮：尾高忠明

ピアノ：亀井聖矢*

コンサートマスター：近藤 薫

6/23

6/25

6/27

尾高忠明：オーケストラのための『イマージュ』(約10分)

〈ラフマニノフ生誕150年〉

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 八短調 Op. 18* (約35分)

- I. モデラート
- II. アダージョ・ソステヌート
- III. アレグロ・スケルツァンド

— 休憩 (約15分) —

ラフマニノフ：交響曲第1番 二短調 Op. 13(約44分)

- I. グラーヴェーアレグロ・マ・ノン・トロツポ
- II. アレグロ・アニマート
- III. ラルゲット
- IV. アレグロ・コン・フォーコ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等創造支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会(6/27)

協力：Bunkamura(6/25)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©Martin Richardson

指揮

尾高忠明

Tadaaki Otaka, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 桂冠指揮者

1947年生まれ。国内主要オーケストラへの定期的な客演に加え、ロンドン交響楽団、BBC交響楽団、ベルリン放送響など世界各地のオーケストラに客演。1991年度サントリー音楽賞受賞。1997年には英国エリザベス女王より大英勲章CBEを授与された。その他1999年には英国エルガー協会より日本人初のエルガー・メダルを授与されたほか、1993年ウェールズ音楽演劇大学より名誉会員の称号、ウェールズ大学より名誉博士号、2012年有馬賞（NHK交響楽団）、2014年北海道文化賞、2018年度関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、2019年第49回JXTG音楽賞洋楽部門本賞等を受賞。2021年秋旭日小綬章を受章。

現在NHK交響楽団正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団音楽監督、BBCウェールズ・ナショナル管弦楽団桂冠指揮者、札幌交響楽団名誉音楽監督、東京フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、読売日本交響楽団名誉客演指揮者、紀尾井ホール室内管弦楽団桂冠名譽指揮者。「東京国際音楽コンクール<指揮>」審査員長。また複数の大学で後進の指導を積極的に行っている。



©T. Tairadate

ピアノ

亀井聖矢

Masaya Kamei, piano

2022年、ロン＝ティボー国際音楽コンクールにて第1位を受賞。併せて「聴衆賞」「評論家賞」の2つの特別賞を受賞。2001年生まれ。4歳よりピアノを始める。2019年、第88回日本音楽コンクールピアノ部門第1位、及び聴衆賞受賞。第43回ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、及び聴衆賞受賞。2022年、マリア・カナルス国際ピアノコンクール第3位受賞。ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールセミファイナリスト。これまでに、N響、読響、東響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、東京シティフィル、関西フィル、京響など、国内の主要オーケストラと共演。テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHK「クラシック倶楽部」などメディア出演も多数。これまでに、青木真由子、杉浦日出夫、上野久子、岡本美智子、長谷正一の各氏に師事。愛知県立明和高等学校音楽科を経て、飛び入学特待生として桐朋学園大学に入学し、2023年3月に同大学を首席で卒業。2023年には、文化庁長官表彰（国際芸術部門）、出光音楽賞、岐阜県芸術文化奨励賞、愛知県芸術文化選奨文化新人賞を受賞。2021～2022年度公益財団法人ロームミュージックファンデーション奨学生。第51回公益財団法人江副記念リクルート財団奨学生。

楽
曲
紹
介

解説＝林 昌英

尾高 惇忠
オーケストラのための『イマージュ』

作曲家・尾高惇忠(1944-2021)は、東京藝術大学からパリ国立高等音楽院に学び、帰国後は作曲のほかピアニスト・教授としても活躍した。父は作曲家・指揮者の尾高尚忠、母はピアニストの尾高節子、弟は本日の指揮者の尾高忠明。さらには曾祖父に渋沢栄一や同名の実業家・尾高惇忠。その家系には著名な文化人や実業家が並ぶ。

『イマージュ』は1981年民音現代作曲音楽祭のために書かれた、惇忠の最初の本格的な管弦楽作品。無調的ではあるが、緊張感の中に20世紀作品ならではのソノリティの美しさが光る、凝縮された一篇。

惇忠は作曲に対しては非常に慎重で、残された作品数も多くはない。マエストロ忠明のインタビューによると、『イマージュ』も難産で、初演直前には非常にナーバスになっていたという。もちろん初演は無事に成功して、翌1982年には父・尚忠の功績を記念して創設された「尾高賞」に本作が選ばれた。なお、初演を担当したのは本日と同じく、尾高忠明指揮の東京フィルだった。

【作曲年代】1980～81年 【初演】1981年5月30日、東京文化会館にて尾高忠明指揮、東京フィルハーモニー交響楽団による

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3(3番はコントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、サスベンド・シンバル、タムタム、ヴィブラフォン、マリンバ)、ハーブ、チェレスタ、ピアノ、弦楽5部

ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第2番 八短調 Op. 18

1897年の交響曲第1番初演が音楽史に残るような大失敗に終わり、大きな挫折を味わったセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)。そこからしばらく作曲家と

してスランプに陥り、本格的な創作活動に戻るのはその3年後になるが、その間はオペラ指揮者として高評価を得て、後に世紀のバス歌手となるシャリアピンと出会って親友となり、大作家のチェーホフから温かい賞賛を受け、文豪トルストイとの面会ではなぜか説教をされるなど、多くの経験や親交を積み重ねていた。そして精神科医のニコライ・ダリーと出会い、1900年前半の数か月にわたって催眠療法を受けて良い結果を得た。この年に取り組んだのがピアノ協奏曲第2番で、同年にまず第2・第3楽章が作られて12月に先行初演。第1楽章も含めた全曲初演は1901年の秋、作曲者自身のピアノ独奏で行われ、大成功を収めた。本作は恩人ダリーに捧げられた。

ロシアの教会の鐘を模したピアノの和音による序奏から、オーケストラが重厚なテーマを奏でる名場面で始まる**第1楽章**。ロマンティックな旋律が胸に迫る、情感あふれる**第2楽章**。そして、舞曲的で前向きな第1主題と歌謡的な第2主題で展開していく**第3楽章**。終盤はピアノの煌びやかなパッセージと、雄大な第2主題の再現がクライマックスを作り上げる。

荒削りで先鋭的な第1交響曲と比べて、わずか3年後の第2協奏曲のこなれ方とポピュラリティは際立つ。それは妥協などではなく、気負いや背伸びもあった交響曲から、経験を積みつつ自分の強みを見つめ直した成果であり、万人に愛される作品を生み出せる自らの能力にも確信をもてたに違いない。

【作曲年代】1900～01年 【初演】1901年11月9日、モスクワにて、アレクサンドル・ジロティ指揮、作曲者自身の独奏による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦楽5部、独奏ピアノ

ラフマニノフ

交響曲第1番 二短調 Op. 13

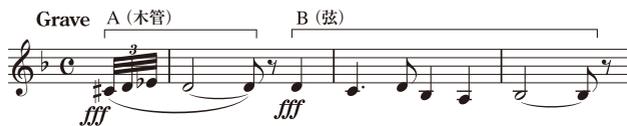
幼少期からペテルブルク音楽院に入ったものの、指導法が合わずやる気をなくしていたラフマニノフは、12歳でモスクワに移り、名教師ズヴェーレフの厳しくもハイレベルな指導を受けて才能を開花。モスクワ音楽院ではピアノと作曲を学び、いずれも優秀な成績を取めた。1892年の作曲科卒業作品であるオペラ

『アレコ』はチャイコフスキーの絶賛も受け、卒業後は作曲家としても順調、交響曲の作曲に向けてステップを踏んでいった。

しかし、満を持して完成した交響曲第1番、1897年3月のペテルブルクでの初演は歴史的な失敗に終わった。作品自体に未熟さはあったとしても、その失敗ぶりは不可解なほど。理由は諸説あり、以前は初演指揮者を務めたグラズノフが無能、酒を飲んでいたなどの説明が主流だったが、新曲が多い演奏会で練習不足だったのは事実としても、無能とは別の話だし、飲酒説に至っては一方的で根拠に欠ける。それよりはペテルブルクとモスクワの音楽界の確執が一因だった可能性ははるかに高い。有り体に言えば、“ライバル都市に移って調子に乗っている若造が、挨拶もなしにペテルブルクに乗り込んでくる”という構図になってしまったのである。楽員のモチベーションは低下、有力者の視線は冷たく、中でも「ロシア五人組」の一員だったキュイは敵意むき出し、「地獄の住人を喜ばせる」というほぼ罵詈雑言の酷評はよく知られる。新進作曲家にとって、作品への正当な批判や演奏の問題はまだしも、自らへの過剰な悪意は想定を超えていたはずで、スランプに陥ったのも無理からぬことだった。

その後第1交響曲は封印状態になり、作曲者自身が再び聴くことはなかったが、1940年、最後の大作「交響的舞曲」第1楽章の結尾にその一節をしのばせた。それも聖歌のような形で。初演から40年以上を経た晩年、やっと心のつかえを浄化、昇華できたのである。なお、「交響曲第1番」としてスコアが復元されたのは1945年、ラフマニノフが世を去って2年後のことである。

●譜例1 交響曲第1番の主要主題(第1楽章冒頭)



●譜例2 「怒りの日(ディエス・イレ)」



交響的舞曲で引用した一節は、第1交響曲の主要主題(譜例1のB)。その最初の4音の音型は、ラフマニノフが生涯にわたり多用したグレゴリオ聖歌の「怒

りの日(ディエス・イレ)」(譜例2)の引用とも考えられてきた。本作作曲時に「怒りの日」そのものを想定していたかは議論の余地がある。ただ、少なくとも最初の4音の「元の音から下がって、戻って、また下がる」音型(跳躍幅は別として)に、作曲しやすいという感覚や愛着はあったはずで(例えば第2協奏曲第3楽章第1主題もこの上下の音型で始まる)、後の「怒りの日」の偏愛にも繋がっていく。

それにしても、第1交響曲はいま聴いても十分にユニークだ。調性は緊張感と不吉さのあるニ短調。第1楽章冒頭の「細かい3連符の前打音」(譜例1のA)は各楽章冒頭にも現れ、その直後の主要主題(譜例1のB)のモチーフは全曲の循環主題となり、全曲中に細かく執拗に張り巡らされていく。規模の大きいスケルツォの第2楽章、抒情的なラルゲットで甘美な旋律が美しい第3楽章を経て、第4楽章はさらに強烈。開始直後に主要主題がニ長調の大打進で現れ、ハイテンポな舞曲調の主部が盛り上がり続けると、終盤に一発の銅鑼(スコアの指示はメゾフォルテ)が世界を止める。最後は前打音モチーフによるフレーズが強迫的に繰り返される。フィナーレのデモーニッシュさは、さながら“ラフマニノフ版ワルプルギスの夜”で、「地獄の住人」の表現も、ある種しっくりくるほど。若き天才の情熱と才能が迸る、最高の野心作である。

[作曲年代] 1895年 [初演] 1897年3月27日、ペテルブルクにてアレクサンドル・グラスノフの指揮による

[楽器編成] フルート3(3番ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム)、弦楽5部

はやしまさひで(音楽ライター)／出版社勤務を経て、音楽誌制作と執筆に携わり、現在はフリーライターとして活動。「ぶらあぼ」等の音楽誌、Webメディア、コンサートプログラム等に記事を寄稿。オーケストラと室内楽(弦楽四重奏)を中心に執筆・取材を重ねる。2020年桐朋学園大学カレッジ・ディプロマ・コース音楽学専攻修了、研究テーマはショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲。